

新学習指導要領全面実施に向けた 外国語教育における小中連携

—大和郡山市教育委員会の取組—

大和郡山市教育委員会 指導主事 福 西 宏 文

FUKUNISHI Hirohumi

県立教育研究所 指導主事 杉 浦 朝 香

SUGIURA Tomoka

要 旨

新学習指導要領の全面実施に向け大和郡山市内 11 小学校と 5 中学校の連携の在り方や教員の指導力育成について、小中が協働して、小学校外国語科への指導内容のポイントや指導方法等を共有し、相互の授業公開を中心として、これからの小中連携の道筋を作る。

キーワード： 小中連携、指導力育成、指導内容のポイント

1 はじめに

令和 2 年度から始まる新学習指導要領全面実施を迎えるに当たり、新学習指導要領の理念・趣旨を周知し、その全面実施に向けての改善を図っていくために研修の充実が不可欠な課題である。特に外国語活動は、5・6 年生で「外国語科」と正式教科化となり、校種を越えて中学校英語へのスムーズな接続が大きな課題となっている。平成 27 年 12 月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」において、新たな教育課題に対応した外国語教育における教員養成の充実が求められている。各地域の指導者となる「英語教育推進リーダー」を養成し、小中高の接続を意識した指導計画の作成や学習到達目標を活用した授業改善などについて、指導・助言を実施することと示されており、教員が学び続けられる環境と体制の整備が必要である。

本市では、以前より同じ校種連携の一環として、互いの授業を参観し合う取組を行ってきたが、それだけでは、十分な連携とまでは言えなかった。また、異校種間の連携はほとんど取れておらず、英語を担当している中学校教員のほとんどが、小学校外国語活動教材「We Can!」の中身を知らない状況であった。さらに、小学校外国語教育の先行実施を行うことに、不安を抱えている小学校教員も多くいた。

そこで、「小学校外国語活動・外国語科の円滑な実施に向け、コミュニケーション能力を養い、グローバル化に対応した人材の育成を強化するため、各学校間の情報交換や外部専門機関等と連携した効果的な研修を通して教員の指導力向上を図る」ことを目的とし、教科化に向けたスムーズな移行ができるよう、平成 30 年 5 月に「小学校外国語活動・外国語科導入に向けての連絡会」

(以下「連絡会」という。)を立ち上げた。

2 1年目の取組

(1) 連絡会の発足

連絡会の発足に当たり、小学校間の情報共有をするだけでなく、小中連携を図ることや、外国語指導助手(以下「ALT」という。)との連携も深められるように考え、各小学校より外国語活動の主任、英語専科の中学校教員、ALTをメンバーで構成した。

第1回研修会に向けて、事前に各小学校の教員にアンケート(資料1参照)を取り、各校の現状を把握した。その結果「ALTとのティームティーチング(以下「TT」という。)の方法」、「具体的な授業の進め方」、「小中の学習のつながりと連携」、「スモールトークの方法」、「教材の使い方」、「評価」、「英語の発音」等多くの不安を抱えていることが分かった。これらを受け、「教員の指導力向上と授業改善」、「英語の授業を効果的に行うための環境整備」、「年間指導計画や教材開発の作成」、「小小連携・小中連携」の4つを1年間の課題とした。

(2) 第1回研修会 平成30年5月8日

第1回の研修会では、教員に新学習指導要領で目指すポイント、外国語活動の授業づくり、クラスルーム・イングリッシュを用いた授業の進め方、具体的な活動例の提示を中心に行った。それ以降、市内11小学校18名の教員、ALT、英語専科の授業を自ら参観して回った。参観を通して、中学校での英語学習に下記のような効果が期待できると思われた。

- 「あいさつの仕方を理解しており、きちんとできる。」
- 「数字、曜日、天気、月を言える。(知っている語彙数が多い。)」
- 「簡単な会話を知っているので、最初からQ&A活動ができる。」
- 「ALTが指導した発音をネイティブらしく発音できる。」
- 「授業で英語を使用するグループ活動に意欲的に参加できる。」
- 「英語の指示を理解できるが増える。」
- 「ALTとの接し方に慣れている。」
- 「中学校の英語の授業に抵抗感が少なくなる。」

(3) 第2回研修会 平成30年8月27日

「ALTとの授業の進め方について」をテーマとした第2回研修会を実施した。外国語活動において「ALTは、担当教員の指導のもと、担当教員が行う授業を補助する」となっているにもかかわらず、参観においては、ALT主体の授業が多く見られたことが気になった。また、平成30年度大和郡山市に在籍のALTは、2名とも大人しい性格であったため、大和郡山市教育委員会(以下「市教委」という。)として、ALTと日頃からコミュニケーションを図り、ALTが英語教育において果たす役割は大きいことを話し、教師としての自覚を促した。しかし、2名のALTは、学校現場ではあまり教員とコミュニケーションを取らず、1日の大半をイングリッシュルームで過ごすことが多かった。

研修会前に、教員だけでなく、ALTからもアンケートを取り、お互いがどのような役割をすれば授業改善につながるか率直な意見を聞いた。教員からは、「ALTがT2になることで、担任がどのような立ち位置で授業を行えばよいか戸惑っている」「ALTとの意思疎通が難しい」「多忙すぎて打合せができない」「ALTを活用した授業展開の方法がわからない」等の意見が出た。ALTからは、「打合せの時間が十分でない」「児童生徒のことをよく知らないので担任の協力が

必要」担任教員が授業中に、教室の後ろに立っていて困ったことがあった」等の意見が出た。そこで、授業でのALTと担任教員それぞれの役割を明確にするために、担任教員とALTの役割を示した(図1)。研修以降、ALTにお任せの授業は減り、担任教員がT1であるという意識が強くなった。しかし、ALTより「教員によって授業の進め方が異なり、合わせるのに苦労する」という意見もあったので、基本的な授業の流れを示し(図2)、打合せ用紙も簡単なものを例示した(資料2参照)。

		授 業		
	教材の準備	授 業 者	支 援	評 価
担 任 T 1	児童の実態をもとに主に担任が行う	授業がスムーズに流れるように指導する	児童の実態を考慮した声かけをする	児童の変容を評価する
A L T T 2	担任から依頼されたものを準備する	英語やジェスチャー等で言語や文化を教える	英語で積極的に働きかける	英語という観点から評価する

図1 担任とALTの役割

〈1 単位時間の基本的な学習過程〉	
・ Greeting	あいさつ
・ Warm up	歌や簡単なゲーム等
・ Review	前時の復習等
・ Aim	本時のねらい・目標
・ Practice	練習(新出表現の理解と練習)
・ Activity	主となる活動(ゲーム等)
・ Reflection	本時の振り返り
・ Closing	あいさつ

図2 基本的な学習過程

(4) 2 学期・3 学期の取組

次の取組として、中学校英語教員が校区内の小学校外国語活動を参観し、研究協議する小中連携の取組を2学期から3学期にかけて行った(表1)。

表1 小学校外国語活動の参観日程

日付	授業者	参観校
平成30年10月22日・24日	郡山北小学校	郡山中学校
平成30年11月20日	矢田小学校	郡山西中学校
平成31年1月29日	片桐西小学校	片桐中学校
平成31年2月7日	片桐小学校	郡山南中学校
平成31年2月12日	平和小学校	郡山東中学校

授業公開した小学校教員は、高い目的意識をもって授業改善に取り組んでいた。研究協議では、聞く・読む・話す・書く活動の指導方法について具体的な悩みの相談内容について話し合った。一方、中学校教員は、小学校での活発な活動に驚いていたが、教員が授業中に使っている英語の表現について指摘をする場面があり、互いの新学習指導要領の目標を理解していないことがわかった。それぞれの新学習指導要領の目標は、以下のとおりである。

・小学校外国語活動の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、話すことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る素地となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

・小学校外国語科の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

・中学校外国語科の目標

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、簡単な情報や考えなどを理解したり表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

※素地は積極的に活動に参加する態度の育成

※基礎では意欲だけでなく、基礎的な英語の運用を求めている。

しかし、小学校教員と中学校教員の持ち味も分かった。小学校教員は、子どもと一緒にいる時間が長いので、「子どもの変化を見取る観察力が鋭く、授業のアイデアも豊富にある」。一方、中学校教員は、自分でテスト作成をするため、「どのような力が付いたかを見取る力は高い」。これら互いの良さを学ぶ機会を増やせば、小学校教員は、評価のことで役立ち、中学校教員は、もっと活動を入れた授業作りができると思った。

今回の参観を通して、来年度の課題もいくつか見つかった。1つ目は、令和2年度の教科化に向けての評価規準の作成。これは多くの教員が不安をもっていた。2つ目は、令和元年度にALTが1名増員されることによる、より効果的なALTの活用方法。3つ目は、より効果的にICTを活用した授業づくり。4つ目は、各中学校区での授業参観まで実施できたので、深い議論までできる小中交流への発展。これらの4つを来年度の取組として考えた。

3 2年目の取組

(1) 第1回研修会 令和元年6月13日

連絡会が2年目になり、少し変化も取り入れた。1つ目は、小中連携がより推進できるように、メンバーに中学校教員を増やし、ALTと普段からコミュニケーションを図ることができるようにALT3名体制とした。2つ目は、研修会の挨拶や進行は英語で行い、新学習指導要領を意識させることを目的とした。そして、昨年度の課題改善のために、次の4つを具体的な取組として示した。

ア 来年度の教科化に向けて、評価規準の作成

(7) 評価観点については、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点に整理する。毎回の授業で全てを見取るのではなく、単元や題材を通じたまとまりの中で学習・指導内容と評価の場面を適切に組み立てていく。

(4) 発表、グループの話合い等の多様な活動に取り組みさせるパフォーマンス評価を取り入れ、ペーパーテストの結果にとどまらない、多面的・多角的な評価を行っていく。

イ ALTと連携した授業づくり

(7) 指導案を基に、英語を使いながらALTに自分の言いたいことを伝えるようにする。始めから完璧な英語で話そうとせずに、ALTに助けてもらいながら打合せを進めるようにする。

(4) 担任・英語専科がT1、ALTがT2として授業展開を行う。担任・英語専科は、授業のコーディネーターとして、児童が言いたいことを引き出し、英語で言えないことを代弁する等、意思疎通をサポートする。また授業中の児童生徒の観察を行い、ALTは児童生徒の状況に合わせて発話するなど、ALTと児童生徒をつなぐ。

ウ ICTを活用した外国語の授業の充実

既に各校ではデジタル教科書をはじめ、様々な視聴覚教材・ICTが積極的に活用されている。今年度、各校の普通教室でICT環境が整備されることに伴い、より効果的な活用方法について研修、情報交換を行う。

エ 小小連携・小中連携

(7) 連絡会を通じて学校間の連携を密にし、取組や様々なアイデアを共有し、日々の指導や授業づくりに生かせるようにする。

(4) 「9年間で児童生徒を育てる」という考えのもと、小中連携の取組を通して、様々な側面から児童生徒の実態を把握し、教員の共通理解を図る。

(2) 第2回研修会 令和元年8月9日

第2回研修会は、ALTに関する研修とした。学校によっては、ALTが来ると「授業の進度が遅れる」、「授業で特別なことをしないといけない」等の理由で敬遠されているところがあった。小学校では担任がT1となることへの負担、中学校ではテスト範囲に関わって時間の余裕が無いことが考えられる。中学校の新学習指導要領では、英語で授業を行うことを基本とすることが求められているが、英語教員の英語力に個人差があるため、いきなり英語での授業に移行するのは難しいので、ALTとTTをすることで徐々に英語の活動時間を増やす必要がある。そこで、それぞれ校種の実状が違うため研修を校種別に実施した。研修ではALTの派遣会社にも参加してもらい、新学習指導要領を確認しながら、言語活動に関する研修を行った。

外国人と接する機会の少ない本市の子どもたちにとって、日常的にALTが学校にいる意義は極めて大きい。目の前にいるALTから生きた英語を学ぶ機会を増やすため、ALTにも、「いろいろな学校行事への参加」、「給食を児童生徒と一緒に食べる」、「昼休みに子どもたちと一緒に遊ぶ」等、授業の枠を超えた活動にも積極的に参加するように要請した(図3)。



図3 休み時間の様子

(3) ICT環境整備

2学期に市内全ての普通教室にICT環境整備が行われた。2学期以降、授業スタイルに大きな変化が出てきた。片桐西小学校では、Skypeを使い、6年生がシンガポール日本人学校の小学生と英語でゲームを行ったり小学校の思い出を伝え合ったりした。シンガポールの小学生から「奈良の有名な観光地はどこですか」「方言はありますか」の質問があり、それに対して英語で答えていた。片桐西小学校の6年生からは「日本のアニメは見られますか」の質問があった。

授業以外でも、国際交流の一環として、中国からの小学生が市内の複数の小学校を訪問して交流する機会が増えてきている。英語を母語としていない国の人たちとも英語を通して交流する場

面が見られるようになり、子どもたちは「英語という共通語」を使ってコミュニケーションできることを感じていた。

中学校の授業でもデジタル教科書での音読指導、英語の音楽を使ったディクテーション、教科書に掲載されている楽器の動画での確認、校外学習について英語でプレゼンテーション、スピーキングテストの録画等、授業においてICTを活用する場面が増えた(図4)。特にプレゼンテーションにおいて、生徒が写真や図を使って発表し、話す内容において整理できて話しやすくなった。聞く側も、より集中して聞くことができていた。ICTを活用した授業を行うことは、これからの時代の教員に求められる資質能力の一つとなっている。



図4 ICTを活用した授業

(4) 第3回研修会に向けての取組

第3回研修会に向けて、昨年度小学校6年生だった児童が今年度中学校1年生になり、これまでの1年生と教員の変化を確認するため、各校1年生の授業を自ら参観して回った(表2)。

表2 中学校1年授業参観

日付	参観校	授業者
令和元年11月15日	片桐中学校	2名
令和元年11月18日	郡山東中学校	1名
令和元年11月20日	郡山南中学校	2名
令和元年11月21日	郡山西中学校	1名
令和元年12月5日	郡山中学校	2名

参観のポイントとして、「授業のめあてや目標を生徒に示しているか」「生徒が英語を使えるようなペアワークやグループワークの学習形態を取り入れているか」「教員がどれくらいの割合で英語を使って授業を行っているか」「ICTを活用しているか」に注意して参観を行った。これらの観察と「令和元年度英語教育実施状況調査」の結果を活用し、第3回研修会の資料(資料3参照)を作成した。

(5) 第3回研修会 令和2年1月17日

「大和郡山市内各中学校課題と来年度に向けての取組」として第3回研修会を行った。

課題1として「クラスルーム・イングリッシュを使った授業展開を行う」とした。新学習指導要領では、「生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。その際、生徒の理解の程度に応じた英語を用いるようにすること」となっている。参観した際、ほとんどの教員は、英語を使っての授業を試みていたが、「書けた人は、Close your notebook.」のように、日本語と英語が混じったフレーズが多かった。これらはクラスルーム・イングリッシュを活用すれば、教員の能力からも十分に改善できることであるし、スクリプトを活用すればもっと授業で生徒が教員から英語を聞く機会につながる。

課題2として「生徒の英語活動を授業の中心に」とした。今年度実施した全国学力・学習状況調査の[生徒質問紙]「1、2年生のときに受けた授業では、原稿などの準備をすることなく、(即

興で) 自分の考えや気持ちなどを英語で伝え合う活動が行われていたと思いますか」で、当てはまると回答した生徒は、51.2%で、全国の62.9%より11.7%下回っていた。教員が質問し、生徒が答えるだけの一方的な授業では、生徒は無意識に受け身のコミュニケーションをとってしまう。生徒が英語を話す際に、正確さよりも伝えたい内容を重視し、すべて正しい英語にならなくても、英語を用いてその場での対応ができることが大切である。ある中学校では、実際に教員が英語で話しかける機会を増やすと、生徒は頑張って英語を話そうとする姿勢に変わっていった。

課題3として「ウォームアップ活動を充実させる」とした。小学校で数字、曜日、天気、月を授業の最初で繰り返し学習してきた。中学校でも同じことをしていると新鮮味がなくなってしまい、少し発展させる必要がある。例えば、未来形や過去形を学習すれば、天気や曜日をたずねる時に、既習事項を取り入れ、より深い会話のやり取りに発展できる。中学校1年生の後半や2年生で学習する不規則動詞の過去形、want toの不定詞、can等の文法事項は、小学校の既習事項である。これらを入学した時から使っていけば、幅の広い言語活動ができる。

課題4として、「小学校英語と中学校英語の違いを理解する」とした。課題2や3で挙げたように、小学校の外国語活動は、活動が中心になっていることや学習内容を知っていれば、もっと生徒たちに深い学びをさせることが可能となる。しかし、令和元年度英語教育実施状況調査結果の「小中連携の実施状況」で、5校中2校しか実施していない結果となり課題が残った(表3)。

表3 「小中連携の実施状況」の集計結果 n=5

	実施した(する)	実施しなかった(しない)
令和元年度実績	2校	3校

課題5として「パフォーマンス評価を実施する」とした。令和元年度英語教育実施状況調査結果では、表4のような結果であった。平成28年12月の中央教育審議会では、「小学校高学年の教科としての外国語教育における「観点別学習状況の評価」についても、中・高等学校の外国語科と同様に「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」の3観点により行う必要がある。その際、必要な資質・能力を育成するための学びの過程を通じて、筆記テストのみならず、インタビュー(面接)、スピーチ、簡単な語句や文を書くこと等のパフォーマンス評価や活動の観察等、多様な評価方法から、その場面における児童の学習状況を的確に評価できる方法を選択して評価することが重要である。」と求められている。

表4 「話すこと」及び「書くこと」における「外国語表現の能力」を評価するためのスピーキングテスト及びライティングテスト等パフォーマンステスト実施状況の集計結果 n=5

	スピーキングテスト・ライティングテスト両方実施	スピーキングテストのみ実施	ライティングテストのみ実施	スピーキングテスト・ライティングテスト両方実施なし
1学年	0校	4校	1校	0校
2学年	3校	1校	0校	1校
3学年	3校	1校	0校	1校

課題解決の取組として、令和2年2月14日に郡山西中学校をモデル校として、市内の3名のALTを一斉配置し、パフォーマンス評価(「話すこと」「書くこと」)を試行実施した。実施に当たり教員とALTには、「生徒たち自身ができるようになったことを実感し、次の目標設定ができるようにするために実施する」「ALTに聞くことをあらかじめ準備させ、どの生徒でも取り組み、

もっと話したいと思える時間になるよう工夫する」ことの2つを重視して取り組むように伝えた。第1学年はALTからの簡単な3問程度の質問に対して生徒に答えさせ、その後、ALTから提示された絵について説明するパフォーマンステストを実施した。第2学年は、事前に生徒自身が興味あることについて、クラスメートにアンケートを取ったデータをグラフ(図5)にし、ALTに対してプレゼンテーションを行った。パフォーマンステスト後の生徒たちの振り返りシートでは、ほとんどの生徒が次回のパフォーマンステストに対して前向きな意見であった。来年度に向けて小中学校でも実行可能で分かりやすいルーブリックやパフォーマンス課題の設定なども含め、さらに研究を継続し深めていきたい(資料4参照)。

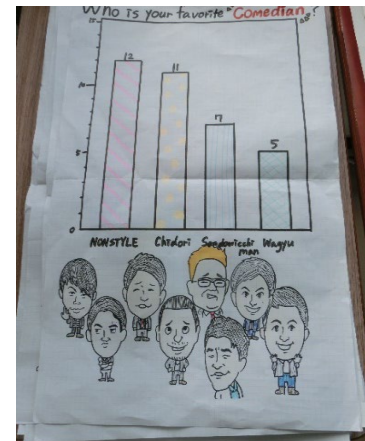


図5 生徒の
プレゼンテーション資料

各中学校区に分かれての意見交換会を研修の最後に行い、下記のような意見が出された。

○郡山西中学校区

- ・以前の1年生と比べて力の差が開いている。英会話を習っている生徒が増えた。
- ・小学校でどんな種類のゲームやアクティビティをしていたか知りたい。
- ・小学校でしてきたことをどうつなぐかも大事であるが、してきたことを繰り返しても良いのではないか。
- ・中学校1年生から知っていることをどんどん使う機会を与えることが接続ではないか。
- ・ローマ字のへボン式を市で統一した形で指導してほしい。

○郡山南中学校区

- ・以前よりリスニング力が良くなっていると思われる。
- ・「話す」「聞く」活動が中心であるため、「その単語聞いたことがある。」という生徒が増えている。
- ・小中でお互いにどんなことをしているのかを知る必要がある。中学校から小学校へ授業を見に行く。
- ・やり取りの形式を見て、中学校につなげる。

○片桐中学校区

- ・アルファベットを書けるようになってほしいということはあるが、一番大切なことは英語を好きになってほしいということである。
- ・片桐小学校6年生が2月に授業で行う「桃太郎」の英語劇を、片桐中学校から見に行く。
- ・3学期、中学校区でSkypeを使った遠隔授業を行う。
小6…中学校の生活を知る。中1…中学校の生活を紹介する。

○郡山東中学校区

- ・発話が好きな生徒が増えた。
- ・アルファベットを書けるようになってほしい。
- ・中学校でもクラスルーム・イングリッシュを使った授業を取り入れたい。
- ・3学期に小中でお互いの授業を見る。
- ・中学校の「話す」活動の様子をビデオに撮り、小学校で見せる。
- ・中学校の評価のポイントなどを小学校の先生に伝える。

○郡山中学校区

- ・英語の発話が好きな生徒が増えた。
- ・英語の音に慣れている生徒が増えた。
- ・3学期に小中でお互いの授業を見る。
- ・ローマ字（ヘボン式）で名前を書けるようになってほしい。
- ・小学校では発話をする楽しさを伝えているので、中学校でもつないでいく必要がある。

4 次年度に向けて

次年度より、小学校高学年において外国語の教科化が本格実施される。そして、連絡会も3年目を迎える。当初からの目的である「小学校外国語活動・外国語科の円滑な実施に向け、コミュニケーション能力を養い、グローバル化に対応した人材の育成を強化するため、各学校間の情報交換や外部専門機関等と連携した効果的な研修を通して教員の指導力向上を図る」の達成に向け、2年間をかけて、主に外国語担当教員やALTの意識改革を行ってきた。小学校教員、中学校教員、ALTそれぞれの立場はあるが、連絡会を通してお互いを少しずつ理解し合うことの必要性を改めて感じている。

今後は、①研修会だけではなく授業公開も実施し、小小間や小中間の連携を深めていく、②クラスルーム・イングリッシュやパフォーマンス評価等を市内全小中学校で実施するなど、授業づくりに取り組む、③採択した教科書のデジタル教材を各校のタブレット端末にインストールし、活用することにより、授業のICT化を進める等々、より実践的に指導力の向上を図る取組を行っていききたい。

2020年夏に東京オリンピック・パラリンピックが開催される。本市では、キャンプ地として香港とシンガポールの水泳チームを迎えることになっている。このように、子どもたちにとって、学校で学習した英語を使える機会が今後増えることが予想される。今年度実施した全国学力・学習状況調査の〔生徒質問紙〕において、「英語で学習したことは、将来、社会に出たときに役立つと思いますか」の問いに対して「そう思う」と答えた回答は84.6%と高い。これは生徒たちの英語教育に対する期待度の表れである。子どもたちに使える英語を身に付けさせるためには、必然的な場面を設定した効果的な言語活動を授業で行うことが大切である。

子ども自身が、「自分の意見や考えを英語で相手に伝えることができた」「英語を使ってALTとコミュニケーションをとることができた」と実感し、自信につなげることを指導の重点としていく。本市の子どもたち一人一人が、世界に目を向け夢や希望をもった生き方ができるよう、英語教育の推進を図りたい。そのためには、市教委は学校現場と育てたい児童生徒のビジョンを共有し、それに向けた環境の整備と教員への積極的な働きかけをしていきたい。

謝辞

本取組を進めるに当たり、御協力いただいている関係教員及びALTの皆様、そして、貴重な助言をいただいた匿名の査読者に感謝の意を表します。

参考・引用文献

- (1) 文部科学省（平成29年）『小学校学習指導要領』 p.153 p.169
- (2) 文部科学省（平成29年）『中学校学習指導要領』 p.144

- (3) 文部科学省（平成 29 年）『小学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語活動・外国語編 』 p. 11 p. 67
- (4) 文部科学省（平成 29 年）『中学校学習指導要領（平成 29 年告示）解説 外国語編』 p. 10
- (5) 文部科学省（平成 27 年 12 月 21 日）中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」